第7表　アジア諸国に定着せる中国人と印度人数

地帯別	総人口	定着中国人数	定着印度人数
温帯			
満州・蒙古・アジア・ロシア	—	40,000,000	—
モンスーン地帯			
ビルマ	16,000,000	193,000	1,400,000
マレー半島	5,300,000	1,275,000	624,000
シヤム	14,500,000	2,500,000	120,000
印度支那	23,900,000	700,000	6,000
フイリッピン	16,400,000	117,000	不明
台湾	5,800,000	4,500,000	—
熱帯			
セイロン	5,900,000	—	900,000
蘭領東印度	68,000,000	1,800,000	28,000

（備考）　この数字は R. Mukerjee, Population Problems in South-east Asia, 1945. による。

アルフレッド・ソーヴィー氏「経済と人口」

Économie et Population par M. Alfred Sauvy

岡崎文規

人口現象の実証的研究は、自余の社会現象の実証的研究よりも一そう古い歴史をもつていて、すでに十七世紀に、ペッティー（Petty）をして「世界の一新光明である」と激賞させたグロント（Graunt）の名著（死亡表に基く自然的および政治的諸観察」（Natural and Poltical Observations upon the Bill of Mortality）が現われている。

近代国家の成立と共に、官庁統計機構が整備せられるにつれて、信頼するに足る人口統計資料が豊富に提供せられ、また統計的研究方法が数理的に発達するに至つて、人口現象の実証的研究は一段と盛んになつて来た。殊に、近時、人口問題は、国内的にも、国際的にも、きわめて重要な課題として取上げられるに至つて以来、人口現象に関する実証的研究は、人口学的な、社会学的な、生物学的な諸観点から、続々として発表され、正に現代学界の偉観であるといつてよいほどである。

このことは、人口統計研究の発達のために、まことに好ましいことである。また科学的にきわめて貴重であり、かつ価値の高い研究成果が少くないのであつて、このために、人口統計研究の科学的水準は、年を追うて高まりつつあることも、見逃してはならない事実である。ただ私は、日ごろから不思議に感じていることは、人口現象の実証的研究はかくも盛んであるにくらべて、人口に関する理論的研究がどうして乏しいかという一事である。

この点については、人口現象に関する研究と経済現象に関する研究とでは、その科学的発展の傾向は大いに異つているようにおもわれる。経済現象の研究においては、実証的研究の成果も少くないが、それに劣ることなく理論的研究の業績も少くない。たとえば、近代経済理論は、クルノー（Cournot）派においては、ワラス（Walres）、パレトー（Pareto）、パンタレオニー（Pantaleoni）、シュンペーター（Schumpeter）によつて、またミル（Mill）の後続者としての、マーシャル（Marshall）、ピーグ（Pigou）、ロバートソン（Robertson）によつて、或いはケインズ（Keynes）、ハンセン（Hansen）、サムエルソン（Samuelson）、クライン（Klein）によつて、それぞれの新らしい経済理論が展開されている。近代経済学界のこのような盛況にくらべて、近代人口理論の展開は、遥かに立ちおくているように感ぜられる。

しかし、われわれも、近時、すぐれた一人の人口理論学者をもつに至つた。それは、フランス国立人口問題研究所長アルフレッド・ソーヴィー教授である。氏は、すでに一九四三年に「富と人口」（Richesse et Population）を出版して、人口理論に関する新らしい考想を展開されたのであるが、更に推敲を重ねた上で、本年、「経済と人口」（Économie et Population）を世に公にせられた。本書は、氏の計画されている人口理論に関する三

部作のうちの第一巻であつて、菊版三五六頁の労作である。

人口理論には、時間的にも、また空間的にも超絶しているような永続的なものは一つも存在しないはずであつて、著者は、この著書において、人口に関する一般理論について攻究しているが、決して観念論的な理論を弄んでいるのではなく、資本主義経済制のもとに見られる失業の継続的な統計的観察に基いて構成されたものである。著者の経歴から見て、著者は、最初に、統計官として統計学的知識に精通しているし、景気研究所長として経済現象の分析に通暁しているし、更にまた人口問題研究所長として人口学的識見に卓越していて、新らしい人口理論を構成するために、あらゆる科学的武器を豊かに兼ね備えている。それゆえにこそ、著者は、近代経済学における均衡理論を取入れることによつて、人口理論に新らしい途を拓いたのである。いいかえると、この新らしい人口理論は、近代経済理論を人口学的視角から取扱い、人間の経済への再移入を企てたものと見てよい。

しかも著者は、主張しようとする理論を、経済統計と人口統計との基盤の上に打ち立て、そして最も確実な統計的研究方法によつて組立てているから、この理論は、きわめて強固な建築物の観を呈している。著者は、「富と人口」において、フランスではじめて、適度の観念を利用しつつ、人口現象と経済現象の関係を攻究しようと企てたのであつたが、著者が自ら語つているところによると、十分にその目的を果しえなかつたのであつて、著者は、そののち、数年間の長きにわたつて、経済学的、人口学的省察の末に、本書を世に問うたのであるから、著者に取つて十分に自信のあるものであり、読者に取つて大いに読みごたえのあるものであるはいうまでもない。

本書は、二十五章から成り立つているが、大別すれば、三つの部門に区別することが出来る。第一の部門は、最初の九章であつて、人口の適度という観念を明確にするために、あらゆる角度から精細に考察している。もちろん、人口の適度を問題にするのは、人口理論を構成するにあたつて、その窮極目的ではなく、一つの重要な手段にすぎないのであつて、著者は、「適度人口の概念は、さし当りの便宜にすぎない。人口学者は、中間的手段として、それを利用することが出来るのであつて、それは、あかも数学者が虚数を利用するのと同様である」といつている。

著者は、この人口の適度という観念に、二様の定義を與えている。すなわち第一の場合における適度の観念は、生産活動における労働力人口と賃金との関係に基づいて、これを規定しようとするのであつて、この場合、極大の観念と極小の観念とに対立するものとして適度の観念を明確化しようと試みている。第二の場合における適度の観念は、生産活動における労働力人口のほかに非労働力人口の要素（たとえば老人や幼少年者）を加えて、適度の生活水準につながりをもつている。それゆえに、人口との関係において、適度の生活水準とはどういうものであるかについて、詳しく検討している。

第二の部門は、第十章から第二十章にわたる十章であつて、もつぱら「支配の理論」(théorie de la domination)について論述している。この理論は、本書における最も重要な中心問題であつて、まず第一に、農業経済と工業経済における静態的な人口と経済との均衡または不均衡について論じ、つぎに、生産技術の進歩は、適度人口にどのような影響を與えるか、また職業構成をどのように変化させるかについて論じている。

第三の部門は、最後の諸章であつて、人口の適度水準を確保するために必要な諸々の政策、それに要する経費およびその効果などについて、あらゆる角度から考察している。人口の適度水準を実現するにあたつて、その社会の現実の状態、諸政策を行うための條件や可能性についても検討を加えているのであつて、資本主義経済制のもとで、諸政策が効果的によき結果をもたらしえないとするならば、資本主義経済制は、これらの諸政策を行うに適したよりよい経済制度に席をゆずるほかないであろうとも論じている。

「経済と人口」との概略をかいつまんで紹介すれば、だいたい、右のようであるが、いずれ、それぞれの各章を精読して、著者の論旨を学び取りもつと詳しい紹介を試みる機会をもちたいと考えている。人口学の領域において、このような新らしい、そして科学的水準の高い労作が現われたことは、人口学の将来の発展のために、特に慶賀すべきことであつて、著者の学問的精進に敬意を表さなければならない。